

黄色い鼠

井上ひさし

黄色い鼠

井上ひさし



文藝春秋

黄色い鼠

昭和五十二年七月十日 第二刷

定価 七八〇円

著者 井上ひさし

発行者 桼原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

黄色い鼠 目次

プロローグ

第一章 収容所における日常生活

第二章 奥地ブッシュでの逃走生活

第三章 砂漠での苦行生活

エピローグ

5

17

115

186

250

カバー・扉画
本文イラスト

A・D

小松久子
坂田政則

黄色い鼠



プロローグ

汗と手垢と歳月と、そしておそらくはおびただしく流された血とで汚れ果て、もとは緑色だったらしい皮表紙がほとんど黒に変色し、めくるともうとうの昔に綴糸が切れており、ふっと強息を吹きかけると間にはさまっていたこまかな砂といっしょに頁が四方に飛び散ってしまいそう。な、その小さな手帖とめぐり逢ったのはまったくの偶然による。

「偶然」などというとはじめから勿体をつけ恰好をつけるようであるが、事の仔細はこうだ。まずそのころのわたしの日課から書かねばならない。たいてい十一時にキャンベラ市ノースボーン通の公務員住宅を出て、「シビック」と土地の人たちが呼んでいる商店街をぶらぶら歩いて「キャンベラ・タイムス」という地元の有力紙をどこかで買い求め、十一時半に大学本館に隣接する学生食堂に着く。ここで一個四十セントの——邦貨に換算すれば百六十円、オーストラリアのドルは邦貨四百円に相当していた——ミートパイをふたつたべながらさっき買った新聞を読む。とくに映画案内欄には目を皿にする。常設館は週単位で番組をかえるからまず観たいものを観の

がす心配はないが、市内に十いくつかある映画愛好者クラブ主催の映画会は一晩限りが普通なので毎日注意して見損ってしまうのだ。十二時半になると午前の授業を終えた学生たちで食堂がたて混んでくる。そこでわたしは席を彼等に明け渡し、食堂から歩いて五分の距離にある東南アジア学部館二階の研究室に入る。研究室は八帖ぐらいの広さで、大きな机とファイル・キャビネットと本棚が四架ある。本棚には洋書がずらり……、というところまた恰好がいいけれど、全冊、自宅に置くのは憚られるはばか狼書わしよや狼誌である。帰国のときには捨てねばならぬから、一所懸命に眺め、かつ読む。二時になると日本語科に関するすべての事務をひとりで受け持っているメリー女史が食事から戻ってくる。彼女に日本から郵便物が届いていないかどうかたずね、届いているときはその日一日仕合わせになり、届いていなければ夜更けまで世を呪う。ちなみにこのメリー女史は四十四、五歳、これまで一度も結婚したことがないのに三人の子持ち、しかも三人の子供の父親がひとりひとり違い、それでももう毫も悪びれず、三人とも自力で育てているという傑物で、親切な上に仕事の早いところは職業婦人の鑑である。かがみ

三時になると東南アジア学部館の隣の図書館へ行く。このオーストラリア国立大学には、学生のためのものと、教授や研究員など大学のスタッフたちのためのものと、大きな図書館はふたつある——ほかに各学部ごとに小図書館がある——けれども、わたしが行くのは教授や研究員用の図書館のほうである。くだいようだが恰好をつけるために程度の高いほうの図書館へ行くのではない。学生用図書館とちがいこちらの二階には四万冊近い和書が並んでいる。また日本での発行日よりひと月ちょっと遅れるが、日本の雑誌が百五十種ほどここで閲覧できる。それが目当て

でこっちの図書館に通っていたわけだ。この図書館で日本の雑誌の表紙を眺めるとどういう理由だかほっとした気分になり心が寛いだ。これは船便で届くのでひと月ちょっと遅れるおかげで、新年号を新年に、二月号を二月に、三月号を三月に読めるせいだとおもわれる。ところでこの図書館の二階には和書のほかに漢書も二万冊近く収容されていた。もっと詳しく言うくと、一階からの階段を登って入ったところに和書を収める書架が並んでおり、壁に沿った通路を奥へ行くとやがて漢書の書架に突き当たり、その横に硝子張りの小さな製本室がある、とまあこんな按配式になっている。そして通路のところどころに紙コップを備えつけた給水器がおいであつた。

さて、通路の向い側には庭に向けて窓が並んでいる。ただし新幹線と同じようにこの窓は明かない。つまりは採光のためにガラスが嵌めてあるのである。「せっかくの窓なのに明かないとは、どじな設計ですね」と、あるとき、和書の事務所で働いている日本人女性に洩らしたところ、彼女はこう答えてわたしの蒙を啓いてくれた。「万引き防止なんです。開閉可能な窓にすると、たとえば本を紐でくくって窓から外へそっと垂らしておき、あとでなに喰わぬ顔で図書館を出て、真下にまわって紐を切り本を持ってっちゃうことも可能でしょう。でなければ相棒を見付けてきて、その相棒を窓の下に立たせ、上の窓からぼんぼん本を抛り出すこともできる。そういったことを防ぐために窓が明かないようになっていらいんです」

そういえば、学生用の図書館でもこのスタッフ用の図書館でも、無断持出し防止にはずいぶん神経を使っているようだった。両方とも入口と出口が別になっていた。入口はごく当り前のドアだが、出口は競馬場の発走ゲートのような造りになっていた。規則で決められた借り出し手続き

をすませた本を持ってこの出口のゲートをくぐると、「チーン」と柔かい、しかもとてもよく澄んだベルが鳴るのだが、もしここにひとりの不心得者がいて、正規の手続きを経ずに、ということとはつまり万引きという手段によって本を持出そうとし出口ゲートを通れば、たとえばその本を鞆の底にしのばせようが下着の下に隠そうが、全館に非常ベルが響きわたる仕掛けになっている。調べてみると、全蔵書に特殊な磁気片が仕込んであるらしいということがわかった。非常ベルはこの磁気に敏感に反応して鳴るのである。だから非常ベルを鳴らさぬようにするには、正規な手続きを踏み、貸出係のおばさんに本を機械にかけてもらって磁気を消すか、あるいは貸出係のおばさんとねんごろな仲になるか、どっちかしかない。ではこの特殊な磁気片が本のどこに仕込まれているのか。これについてはいくつもの調査や研究を試みたが、みるべき戦果はなかった。それにしてもまことにきびしい万引き防止体制ではある。オーストラリアの大学教授や助教授たちはそんなに万引きが好きなのだろうか。ちなみに返ってきた蔵書は書架に戻される前にまた機械にかけられ、今度は磁気を吹き込まれるらしい。

採光窓からはなしが横道にそれたが、この採光窓に沿って閲覧用のひとり机が奥まで一列、二十ほど並んでいた。わたしはこのうちのきまったひとつを自分の専用にして、映画見物の予定のあるときは六時まで、その予定のないときは閉館時間の九時まで、近くの書架の『中央公論』とか『言語生活』とか『暮しの手帖』とかいった日本の雑誌のバックナンバーの頁をぼんやりと繰ったり、日本の古典の頁を漫然と眺めたりしてすごした。活字を追うのに疲れると採光窓から庭を眺めた。芝をびっしりと敷きつめた庭の中央にユーカリの大樹があった。ユーカリはオースト

ラリアの代表的樹木で、日本における松のような地位を占めている。ただし種類が七百余もあった、高さも、人間の背丈よりも低いものから樹高二〇米（メートル）という化物みたいなものまで千差万別、幹の色も白あり、赤あり、青磁色ありで、こういう木でございと一口では言えない。ただひとつ共通しているのは、秋口に樹皮が、見えて可哀相になるほど、大きく無惨に剝はげ落ちることだろうか。それともうひとつ、どんなユーカリの木でも例外なく股から枝にかけてが妖婉ようえんだった。ちやうどそれは全裸の若い女が両腿りようももを湾曲させつつ天を指して仰し逆立ちしているように見え、風が吹くとその逆立ちした全裸の女は、長い脚を優雅に、また艶っぽく揺ってゆっくりと踊るのである。そんなわけでわたしは採光窓ごしに小一時間近く図書館の庭のユーカリの木に見とれていることがあった。

この日課が気に入っていたから、よほどの理由がないかぎりこれを崩さぬよう努めたが、あるとき、朝寐坊をして学生食堂へ一時間も遅れて着いてしまったことがある。席は全部塞がっていた。メリー女史の部屋へ郵便物を取りに行こうと考えたが、彼女もおそらく昼食に出ているはずである。仕方がないので図書館で時間潰しをしようと思い、二階のいつもの机にキャンベラ・タイムスをひろげた。が、すぐにのどの乾きを覚え、和書の書架を横切って反対側の通路の水飲み器へ行った。水飲み器には「故障中」という紙が貼りつけてある。そこで通路の奥の製本室の前の水飲み器まで行った。紙コップをひとつ引き抜いたとき、ふと横に置いてあったボール箱のかへ目が行った。紙の切り屑の上にその手帖が乗っていた。心の中でなにかが囁ささやいた。

「拾え。その手帖を拾え」

神田の古書街を歩くとき、また大きな書店に入るとき、わたしはよくこの声を聞く。

「この書店になにかあるぞ」

「おまえに必要な本は右の奥にあるみたいだな」

素直にその声に従うとかならず取獲は保証されていた。そのことを咄嗟のあいだに思い出し、手帖を拾いあげた。そっと表紙をめくると、見返しのところインクでこう書いてあった。

濠洲南オーストラリア州

バーメラ日本人収容所

二七番 佐藤修吉

活字のように輪郭のはっきりした、一画一点ゆるがせにしない書体である。上方に横書で、

自 昭和十七年一月三十日

至 同年五月十七日？

と記してある。「自 昭和十七年一月三十日」はインク書き、書体も几帳面であるが、「至 同年五月十七日？」の方は鉛筆で書いてある。そして、書体は乱れている。ちょうど蛞蝓の這ったあとのようにぐにゃぐにゃと曲りくねり、書き跡がぼやけ、その上鈍く光っていた。それにしてもなぜ「自」と「至」とこのように書体がちがうのだろうか。疑問符も気にかかる。第一頁を開いてみた。そこにはこうあった。

一月三十日。本日午前八時、南オーストラリア州の州都阿德レード市警察署を發ち、正午、バーメラ町の日本人収容所に着く。収容番号二七。羊の毛刈小屋を改造した収容棟が二棟。

ほかに事務棟と作業小屋が四。西の棟が「黄色いならず者」棟で、東の棟が「黄色い鼠」棟
というのだそう。馬鹿にしている。初対面の所長を罵倒し、おかえしに左膝を蹴られてし
まった。夜中まで膝の皿が痛んで眠られず。

数頁読み進んだころ、製本室から館員が出てきて言った。

「その手帖を箱に戻してくださいませんか。ほかの紙屑といっしょに焼却炉で燃さねばなりませ
んから」

「燃すぐらいなら、わたしにいただけませんか」

すでにその手帖の虜（とりこ）となっていたわたしは、手帖を自分の懷中に仕舞いこむ仕種（しぐさ）を何回も繰り
返した。というのは、手帖の持主が、収容されて間もなく、所長からバーメラの町に建設される
野球用グラウンドを設計するよう命令される個所に、見返しの「至 五月十七日？」というくだ
り以上に惹かれてしまったからだ。昭和十七年一月末といえば、日本軍はグアム島を、そし
てウェーキ島を占領し、香港やマニラを陥落させ、マレー半島を「東洋のジブラルタル」といわ
れたシンガポールめざして一日平均約二〇浬（き）という驚くべき速度で攻めくだっていたころだろう。
そのときにあたって、収容所の日本人に野球グラウンドの設計を命ずるとはどういうことなのか
だいたいオーストラリア人は英国の影響もあつてか野球を軽蔑している。それなのに何の必要が
あつて野球グラウンドなのだろう。その理由が知りたかつた。

「差しあげるのはいけませんよ。でも、なぜそんな汚い手帖に興味を持つのです」

「わたしは日本人です。そしてこの手帖を埋めている文字も日本の文字です。日本人がどうして

日本文字で書かれた手帖に興味を持たないですませられるでしょうか」

「なるほど、あなた、日本人でしたか。そういえば、わたしは十年前に日本のカメラを買いましたよ。そう、ペンタックスです。十年間、一度も故障しない。日本のものはじつにすばらしい」

館員はしきりに点頭してボール箱を抱えあげた。

「ちょっと質問したいのですが、よろしいでしょうか。日本人が三十五年も前に使用した手帖が、どうしてここにあったのでしょうかね」

「アボの老人が日本の書物を五冊持ってやってきたんです。えーと、一週間ばかり前のことになりますか……」

アボとはアボリジナル、オーストラリア原住民のことである。

「それで、その五冊の本の間にきたならしい手帖がはさまっていたというわけです。なんでも、その老人が日本人から預かったかなにかしらしいんですがね」

「その老人の住所はわかりますか」

「じつは老人の相手をしたのがこのわたしでしてね。寄贈を受けるときの規則に従って住所をたずねたのですが、彼はこんなことを言っていなくなっちゃいましたよ。『住所なんぞべつにいいじゃないですか。たったの五冊だし、それにわたしは砂漠をしょっちゅうあちこち動き回っているし、どうしても必要なら、エアーズ・ロックとでもしといてくださらんか。あそこはわたしらアボリジナルの聖地、死ねばあの大きな岩がわたしの永遠の住所になるでしょうから』……」

オーストラリアに着いて間もなくエアーズ・ロックを見物していたので、アボリジナルの老人

のこの「聖地」という言い方になるほどとおもった。長さ三・六籽、幅二・四籽、周囲九籽、高さ三五〇米のこの岩は、世界最大の一枚岩で、わたしが見たときは大荒野の真ッ只中に金色に輝きながら傲然と突出していた。だからといって岩肌の色は金色である、としては間違いない。空気中の湿度の上昇下降につれて太陽光線の岩肌への反射の仕方かわり、明け方はピンク色、日没時は赤色という具合に、五色にも七色にも変化するからである。この岩が出来たのは二億三千万年も前だそうだが、砂岩の塊なので、長い間の風化や浸蝕によっていたるところに洞穴や風穴があいていた。そしてそれらの穴の壁面には、蛙や蛇や蜥蜴や蠍の絵が残されていたが、わたしは館員の語るアボリジナルの老人の言葉で、それら砂漠の小動物たちの壁面を一瞬思い泛べていた。

「……それでその五冊の日本の書物というのはいったいどんな傾向のものでしたでしょうか」「自分でたしかめてみなさい、製本室の棚に並べてありますから」

館員は顎を製本室の硝子戸の方へ何度も振ってみせ、それからくるとこっちへ背を向けて通路を去っていった。

製本室の棚の上に並べてあった佐藤修吉氏の蔵書は『鉦山辞典』だの『探鉦要諦』だの『日本鉦山史』だのという鉦山関係の書物ばかりだった。手帖と同じようにどれも汚れるだけ汚れ、表紙はとれかかり、どの頁も裁断際は薄褐色に変色していた。

（手帖とこの五冊の蔵書の持主だった修吉氏は鉦山技師かなんかだったらしい）
そう思いながら念のためその五冊をひと通りばらと繰ってみた。頁には書き込みのあとが

ひとつもなかった。修吉氏は、赤鉛筆で傍線を引いたり欄外に書き込みをほどこしたりしてうれしがっているわたしなどはまったくがう人種に属しているようだった。

わたしは採光窓のそばの机に坐り直し、ふたたび第一頁から手帖を読みはじめた。読み進むにつれて、思わずぶっと吹き出したり、声をあげて笑ったり、手に汗にぎって震えたり、頬に涙を落したりした。なにがそんなにおかしくて、なにがそれほど悲しかったのか、その詳細については追いつき書くとして、手帖の内容は次の四つに大別することができる。

一 バーメラ日本人収容所における抱腹絶倒の日常生活。

二 収容所からの威風堂々の脱走。

三 砂漠における追跡者たちとの赤手空拳の戦い。

四 砂漠での悲愁断腸の結末。

手帖を三度繰り返して読み終えたとき、庭のユーカリの白い幹が赤く染まりはじめていた。四時間も手帖に没頭していたことになる。

（この手帖の扱いをどうしたらいいのだろうか）

頭の中にはまずこの問いがあった。

（遺族を探し出し、手帖の内容をそのままどこかの雑誌に載せるよう説得してみようか）

次に、そう考えた。世間の通念は、戦争中の日本人収容所は辛くて惨めで悲しいものだった、としている。たしかにほとんどの収容所では事情はその通りだったにちがいない。だが例外はあったのだ。そしてまた世間の常識は、日本人には大らかなユーモアのセンスがない、としている。